

もっと知りたい  
ふるさと

24

# 千曲川とのたたかい

杭瀬下というところは、水との深い関係がある。その昔、寛元二年（一二四四）埴科郡舟山郷青沼村と呼称されている。元

地、生い茂る草の上をとんぼが飛んでいる様子が描写されている。

耕作ばかりでなく、水害の復興復旧作業をしたのである。

禄元年（一六八八）芭蕉が入信し、姨捨で「おもかげや姨ひとりなく月の友」という名句を残している。市内にも芭蕉の句が多く残っているが、千曲橋のたもとに、「蜻蛉やとりつき兼し草の上」という「くいせけ連建之」の「芭蕉家」がある。青沼村時代から、千曲川によって沼地ができ、とんぼの水蔓の棲息

杭瀬下の歴史は、水という自然のたたかひである。まさに村を治めることは、水を治めるといつて過言ではなかった。慶安三年（一六五〇）から昭和の

災害状況を表わすことばに、川欠（田の水引堰が土砂で埋まってしまうこと）、川成（予想しなかつたところに自然の川ができたこと）、押堀砂石入（水の勢で田や畑がえぐりとりられ石や砂が入ってしまったこと）、起返（かたくなつた土地を作物が生育するようにたがやすこと）がある。このように、先人は災害復興のため祖先伝来の土地を守ってきたのである。

終わりの頃まで約三三〇年の間、三年から四年に一回の割に、水害の被害を被っており、そのため、中之条代官所へ川除普請用材の払下げを申請している。また、困堤という、増水時堤上をオーバーした水が、また堤内へ戻入するような仕組みの堤防になつた。百姓は、水害の都度、代官所の命令で川除普請作業にかり出され、堤の補修などもした。水害になるとそれにもめげず、田畑の復興に雄々しく立ち上がり、現在のような肥沃な耕地を維持してきたのである。古

老が田畑へ働きに出掛けることを「沖へ行く」といったことを思い出す。それは、田畑の直接

ここは、水禍の多い地域であり、丹精こめた農作物の麦束が水害のとき流されていったことを



芭蕉冢（句碑）



尾米川排水ポンプ場

を、筆者は見聞したことがあった。昭和五十八年（一九八三）更埴市時代に、市庁舎の西側にある杭瀬下土地三六が都市計画によって、住宅地帯に指定された。そして、杭瀬下土地区画整理組合によって都市計画事業が施行された。区画整理事業と一体となつて、市役所により、尾

米川の改修と尾米川が千曲川に流れるところ、昔の名前で落尻に、立派な排水ポンプ場ができた。これによって杭瀬下は水害から免れることができた。これはまさに「治村治水」である。

参考文献 「杭瀬下村誌」

近藤 明